

改訂版の序

腹部エコーの最初の版が出されてから、すでに7年が経過している。この間に、超音波検査の重要性は、研修医・総合医にとってますます高まり、本学では学生実習（BSL）で複数のコマを配置し、検査の頻度の高い腹部エコー、心エコー、さらには最近注目されている血管エコーなどの実習を行っている。さらに臨床の場面でも、ここ数年で新たな機能や装置改良が行われてきているだけでなく、充電式の簡易型の装置が低価格で発売されたことで、ベットサイドでの検査、往診の場でもその利用が広がっている。

腹部エコーは、超音波検査の中で最も標準的な検査であり、腹部症状を主訴に来院された方では、ほぼ必須の検査といっても過言ではない。現在、多くの医師が自分で行うことのできる画像診断として広く利用され、その習得は、臨床研修でも自分でできる検査として期待される項目の一つとなっている。しかし、これを使いこなすには、自分で一つずつ勉強するしかなく、知識に加えて技術的な習得が望まれる。さて、自分で学習する時に大切な点は、解剖、生理、病態などの基礎を理解しながら画像を覚えることであり、その知識の下で、自ら経験を重ねるのが上達の近道であろう。

この本は、超音波検査として最も使用頻度の高い腹部エコーについて、検査の基本に重点がおかれている。さらに、今回は最近の進歩の一つである肝臓領域で多く利用されつつある超音波造影剤、エラストグラフィーなどの話題も取り入れることに努めた。

これまで、多くの読者から本書に好意的なご意見をいただいたことに感謝し、今後も腹部エコーを学ぶための入門書のひとつとして育てていっていただければと考えて、改訂を行った。今後も、より多くの方に、より多くの場面で腹部エコーを行っていただくことで、本書が診療に役立つことを望んでいる。

2014年2月

谷口信行

初版の序

臨床研修制度の導入により、誰でも腹部エコーができるることを望まれるようになった。これは、特に高度に専門分化した大病院より一般病院や救急の現場においてその要求が強く、早期に的確な診断を得るために、また治療を始めるまでの検査時間の節約のため、自分で検査を行うことも稀でない。約25年前に医学部を卒業した自分を振り返ってみると、総合病院での研修後、一般病院、診療所に赴任する前に実施できるようになるべき技術として、心電図、胸部と腹部の単純X線写真読影、上部消化管の内視鏡（または胃透視）をあげられ、研修病院でトレーニングした記憶がある。現在でも、一般病院、診療所での診療において、これらの必要性は変わらないが、1990年代になって新たに超音波検査（特に腹部エコー）が必要な手技のひとつとして加えられてきた。現在大学で教えているBSLの学生にも、ある程度ひとりで検査ができるようにと話している。

超音波検査の特徴は、これまですでに何度も言われてきたことであるが、簡単手軽に、場所を選ばず、精度の高い情報が得られ、廉価であることなどであり、同じ画像診断のX線CT、MRIが一定の施設の一定の場所（放射線部）でなくては検査できないという制限のもとで行われているのと、対照的である。一方、後者はある決まった撮影法に基づいて記録が行われるため、一度撮影されたものについて、医師同士で客観的な討論が行いやすこと、写真さえあれば専門家に相談しやすいなどの長所がある。逆に、超音波検査は検査の自由度が高い一方で、検査による診断能力（記録画像の質、判読のレベル）の差が大きいのが長所でも欠点でもある。すなわち同じ装置（もちろん高分解能の装置の方が情報が多い）を使っていても、検査に習熟している者とそうでない者では、診断能に雲泥の差が出るだけでなく、後者では見落としの不安をかかえることになる。実はこの点は、一般の診察技術である聴診、触診などの能力が、医師により差があるのとよく似ている。超音波の専門家のいる検査室では、これら的一般またはスクリーニング的検査の依頼に応えるのと同時に、さらに進んだ技術である超音波造影を用いた検査、ハーモニックなどの超音波の新たな手技や、超音波内視鏡、経食道心エコーなどが行われているところもある。すなわち、超音波検査は、研修医も含めた一般医ができることが期待されるpoint of care (POC) のような立場と、各科の専門部門または超音波検査室で行う立場があり、一般的な検査と専門的検査としての二重性を有する。

さて、腹部エコーは多くの研修医が消化器領域の研修時代に、必ず研修し

ておきたい技術のひとつである。本書の中で詳細に述べられているが、救急または一般外来では、急性胆囊炎と胆石、腹部外傷による腹腔内出血、腹水の評価、イレウス、消化管の破裂・穿孔に伴う free air、尿路結石、最近では急性虫垂炎の評価も超音波検査で診療初期に評価することが一般的になりつつある。すなわち、これらの疾患の診断法については、一般内科・外科を行うものすべてが習得することが期待されるべきものである。

本書では、これから腹部エコーを学ぶ、または少し学んだが検査の着目点がわからないという研修医、一般内科医などを対象として、実際の場面での腹部エコーの位置付けと、臨床で遭遇することの多い疾患について述べられている。各項は、①腹部エコーはどのようなときにどのような目的で行うといいのか、②基本的な探触子の当て方とその超音波断層像、③検査時に気をつけること、④遭遇することが多い腹部エコー像、⑤救急での腹部エコーの注意点などについて、経験の豊富な先生方に実際の場面を想定して述べていただく。

腹部エコーの習得に重要なものに、超音波の物理的性質や装置の知識、解剖、疾患の病態と病理組織像についての3項目があるが、初心者に特に必要なのは後者の2つである。そのため、本書では、まず正常解剖について解説し、疾患の正常超音波像に慣れることに重点をおいた。また典型的疾患の超音波像はそれぞれどのように描出されるかについてだけでなく、診断の考え方も習得していただきたい。両者をマスターできたら、自分でどんどん経験しながら、より専門的な本などを参考にしつつ守備範囲を広げていくことをお勧めする。超音波の性質は、より興味が出てきてから、勉強してもよいであろう。まずはたくさん経験するだけでなく、異常所見があったらそれはどう考えればいいかを1つ1つおさえながら次へ進むのが上達への王道である。

なお、本書は、『レジデントノート』誌特集に加筆・一部修正を加えてまとめたものである。良き臨床医をめざす皆さんにとって、腹部エコーができるようになれば、一般外来での診療の幅が広がる。本書がその一助となることを願っている。

2006年9月

谷口信行